

〔特集〕 特別支援教育施行 10 年

特集にあたって

窪田 知子

「**特**殊教育」から「特別支援教育」への転換がなされて10年が経過した。はじめは、「どうする」「どうなる」と右往左往していた学校教育現場でも、その理念が求める「**特**別な支援を必要とする幼児児童生徒が在籍する全て（傍点筆者）の学校において実施されるもの」という認識は徐々に浸透してきたように感じる。大学で教員養成に携わる中でも、特別支援教育について学びたいという学生は年々増えていると実感している。

それではこの10年は、障害のある子どもやさまざまな困難を経験している子どもたちにとって、実り豊かな10年だったといえるだろうか。通常の学校・学級は、彼らにとって安心できる学び舎となっているだろうか。本特集では「特別支援教育施行10年」と題して、その検証を試みた。

詳細はそれぞれの論考に委ねるが、この10年をふり返ると、「通常の学級で一人ひとりの教育的ニーズに応じた指導と支援を行うこと」が掲げられながらも、特別支援学校や特別支援学級に在籍する子どもの数は増加の一途を辿っている。これは、医療技術の進歩、障害に対する社会的な認知の広がり、障害等の早期発見・早期療育を経て、手厚い関わりの中でわが子が成長することを実感した保護者の行き届いた教育を求める声などが反映していると考えられる。特別支援学校や特別支援学級がそうしたニーズの受け皿であることは、インクルーシブ教育の実現をめざす上でこれからも重要な砦であり続けるだろう。その一方で、矮小化された“学力”の向上が求められ、学

校そのものが排他的な競争原理・管理主義的な価値観に支配される中で、傷つき、自信をなくし、通常学校・学級を迫られるようにして特別支援学校・学級に居場所を求める子どもたちがいるのではないだろうか。教師も子どもも窮屈さを強いられる学校では、安心して学べるはずもない。本特集ではそうした“逆境”の中にあって、子どもたちの発達要求に寄り添い、丁寧に応えていく実践の報告も多数掲載することができた。通常学級での実践はもとより、通常学校における特別支援教育の一翼を担ってきた特別支援学級や通級指導の実践を通して、「一人ひとりのニーズを把握して適切な指導と必要な支援を行う」とはどういうことなのかをあらためて確認できるだろう。

また本特集では、高校における特別支援教育をめぐる論考も報告されている。2018年度から、高等学校における通級指導教室の制度化がスタートする。小学校・中学校・高等学校と幅広い実践を共有し、学齢期から青年期の子どもたちの育ちを考えていく足掛かりになることを期待するとともに、今後は**幼児期の実践**とも交流していきたい。

最後に、「**障**害の**あ**る（傍点筆者）幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援するという視点」に立つ特別支援教育と、多様なニーズを包み込むインクルーシブ教育との関係性についても、引き続き、議論が必要であろう。本特集が、決して安定して発展してきたとはいえない特別支援教育10年の課題と展望を明らかにする契機となることを心から願っている。

（滋賀大学 くぼたともこ）